



生活保護を受けている人というのが、例えばうちだと、川崎の中では生活保護受給家庭で育つ中高生が2,000人もいるんですよ。びっくりですね。その貧困の連鎖率というのは25%、ですからうちの塾、勉強の学習室に通っている子も、4人に1人は、もう一回、生活保護になっちゃうわけです。生活保護になるということは、働かないということなんです。働かないということは社会的負担ということです。もちろん本当に生活保護を受けなければいけない人たちには当然のごとく福祉がされるべきなんです。だけれども、この子たちには勉強するチャンスがないだけなんです。生まれた環境が違うから、生まれた環境がたまたまそこだったから、勉強する環境、大人が支援してくれる環境がないからそうになっているだけなんです。


**今、日本の子どもたちが直面している問題** 

いじめ  
不登校  
ニートフリーター、ひきこもり  
高校や大学の中退者  
働かない、働きたくない若者  
就職を苦に自殺する若者  
生活保護受給、貧困の連鎖  
子どもの相対的貧困

**子どもの貧困** 

- ・2009年現在18歳未満の子どもの貧困率が15.7%
- OECD加盟34か国中25位(貧困率の年別順位、OECD(2014)データ参照)
- ・生活保護受給家庭を対象とした場合、貧困の連鎖率は25.1%
- ・ひとり親家庭の子どもの貧困率は50.8%
- ・保護者の経済状況が子どもの学力に影響  
日本では教育にお金がかかるため、保護者が裕福だと子どもの学力が高く、保護者の収入が低いと子どもの学力も低いという結果
- ・少年院における新規収容者数出身家庭の生活程度で貧困層の割合は28.8% (犯罪が重くなるほど、家庭の貧困率も上がる傾向)
- ・生活保護世帯の子どもの高校進学率は89.9%と全体平均より約10%低い(2013年度調査、文部省発表)

例えばいろいろな障害を持っているとか、そういう子は大変かもしれない。だからフォローしていつてあげなければいけないけれども、この子たちにはチャンスがなかっただけなんです。ですから、この子たちにチャンスを提供すれば、必ず高校に行って、社会で意欲を持って自立して、社会に貢献する人になっていくことができるんです。それを私たちはやっています。生活保護になると、年間8,000万から1億円のコストがかかります。私たちの税金です。けれど、この事業って、私たち、5,600万で受けているんですけども、全員、意欲を持って、将来、仕事をしたいと言ってくれるわけなんです。安いですよ。めちゃめちゃ費用対効果が高い、これをあまり言うと嫌がられるかもしれないんですけども。だから子供のうちに策を打ってあげれば、すごく元気になって、成長して、社会に貢献してくれる子供たちがたくさん育つということなんです。ということを言いたいんです。その子たちが少年院における、この辺ですね、貧困ということは犯罪率も高くなるわけですよ。御記憶にあるかどうかわかりませんが、川崎市で中学1年生の子供が殺されましたね。あの事件も、やったほうもやられたほうも貧困家庭の中にあります。もし私たち大人がその子たちの面倒をちょっと見てあげることができていたら、あの事件は起きなかったかもしれないと私は思っています。

**貧困世帯の子どもの学力向上を妨げる要因** 

- ・進学に対する親の理解不足等から学習時間が取れない
- ・学習塾に通う資金や大学進学のための資金がない
- ・親の健康問題で子どもが家事の一切を背負わざるを得ない
- ・住環境が厳しい

▼

「無償で」「学習し易い」「場」を設け、学力を向上させ、未来の自分にわくわくすること。

## ●生き生きした人生をサポート

今もこの事業を頑張っているんですけども、子供には可能性があるので、全ての子供に。今日のテーマは、私たちは貧困解消のために活動している団体ではないんですね。子供が自分の人生を生き生きと生きていくために大人がサポートするというをしている団体なんです。その中の、たまたま教育環境のない貧困家庭の子供たちへの支援もしているということなんですけれども、まあ、こういう問題が起きていますということです。いろいろな問題がありまして、進学しなくていいんじゃない？ と親が言ったりとか、お金がないから大学に行けないわとか、高校に行けないわとか、親が健康じゃないから家事をやらなきゃいけないんだとか、あと、今、日本の中には外国の血が流れている子供たちがものすごく増えています。そうすると、親が日本語を話せないから、全部通訳を、親の通学とか、いろいろなことを全部自分がやらなければいけないとか、住環境が厳しくて、これぐらいの6畳一間ぐらいのところに家族6人ぐらいが住んでいて、子だくさんで、小さい弟たちもいるから勉強する環境がないみたいな子とか、そういう子供たちのためには、無償で学習しやすい場を設けて、学力を向上させるということがすごく大事なんです。

日本は識字率が100%だと思われている方が多いと思うんですけども、実は違います。九九が言えないだとか、時計が読めないだとか、アルファベットが読めないという子がたくさんいます。そのまま社会に出たらどうなるかといったら、契約書でだまされちゃいますね。そうすると犯罪が起きたりとか、まあ、幸せが見えない感じがしますね。そんなことが起きていますというのが実態です。そういう、川崎の事件につながるようなことも、塾をやっていると見えてくるというのがあります。

## ●学習支援・居場所づくり事業

こんな感じですね。川崎市中原区において、学習支援・居場所づくり事業というのをやっております。うちの事業の中の1つのものでやっております。そして、私たちは3つの方針を立てています。第3の大人のいる場所です。絶対に見捨てないという安心感を子供に与えます。それは、シニアの皆さん、誰だってできますよね。おまえはだめだ、おまえはだめだと言われたら、おまえはだめな子になっちゃうんです。いい子だね、すごいね、できたねと褒め続けられると、子供も頑張れるんです。大人もそうだと思います。そして学力の向上では、この子たちは、学校や塾では、まあ、塾に行けない子が多いんですけども、おまえはだめだ、おまえはだめだと、やっぱり言われ続けてきているんです。九九が言えなかったら、そりゃだめだと言われちゃいますね。先生だって見切れないというのが実態だと思います。でも私たちは、九九が言えなかったら、「あ、足し算できるんだ、えー、すごいじゃん」と言います。そうやって、「できた」の喜びを、1つ1つ、小さな喜びをかみしめるということをさせています。



### 川崎市中原区において

## 学習支援・居場所づくり事業

中学1～3年生27名対象  
週2回 2時間ずつ  
90回/年



- 1、第三の大人のいる居場所→絶対に見捨てないという安心
- 2、学力の向上→できた！という喜び
- 3、キャリア教育で自分を信じ、未来へ意欲をもつ  
→こうしたい！という希望



それから、この子たちって、高校へ行っても、ゴールデンウィークか夏休みぐらいに中退しちゃうという、これも1つ、日本の中の問題です。東京都では5,000人の中退者が毎年出るんです。中退率が、東京都知事も、ここを何とかしないとその子たちの行き場がないということで、すごい問題に思っている。私たちは、単に高校に行くということを目標にさせていないんです。高校に行って、その後どうするかという未来に希望や意欲を持つ、こうしたいという希望を持たすということが私たちの得意分野としてやっていることで、この3つを大事にしています。そうすると、茶髪でピアスのやんちゃなA君も、やんちゃなA君も、初め来たとき、集中力が3分だったのが90分になっちゃったんですよ。

**「どうせ自分なんか」の気持ちが、  
「頑張ってみたい」に変わっていく。**

茶髪でピアスのやんちゃなA君

「だって、母ちゃん楽にしてやんなきゃだめっしょ」

集中力が3分→90分に！

**WHY?**

「わたし学校では誰とも話してないんだ」と打ち明けてくれたBさん

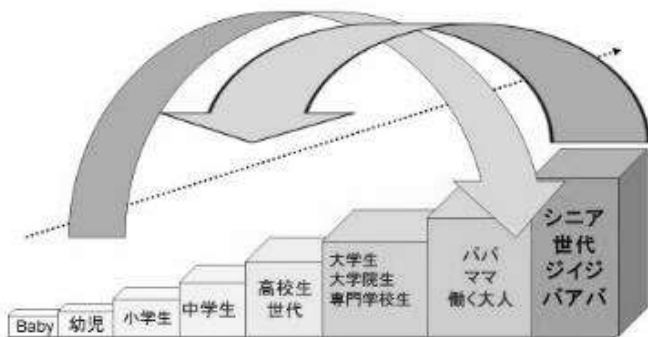
なんと今年は、部活のキャプテンに！

**WHY?**

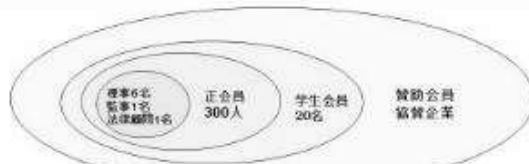
私、誰とも話してないんだと、学校でいじめられていたBさんは、うちのシニアのサポーターたちに応援されて、今年、テニス部のキャプテンになったんですね。行動がすごく主体的で、意欲を持つようになった。そんなことを私たちはやり続けております。

うちの団体は300人の個人会員と法人会員がおりまして。私もバババでした、ここでした。仲間に入れてください。そして、大学生が活動したり、小・中・高校生、こういうぐるぐる回るような関係の中で組織が動いております。大体こんな感じですね。年齢層はこんな感じ。男女比は五分五分です。多様な人たちが動いてくれているというような団体、高校生からシニアまでの幅広い年齢層の方が参加ということです。この方はシニアですね。一緒に小学校へ行って、給食を食べて、子供たちにプログラムを実践したりとかですね。

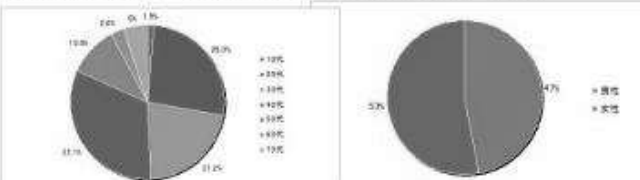
300名の個人会員、法人会員が活動しています



組織構成



高校生からシニアまで幅広い年齢層の方が参加



これはわくわく学習室、さっき申しました貧困家庭の子供への支援です。この子、こういう大学生なんかと、シニアのおじいちゃん、ジイジと、こんな若いかわいい人たちとかと、一緒にみんなで作っていています。これは定時制高校ですね。ワタナベさん、ジイジが活動しております。これもうちのスタッフですけれども、こういう若いかわいい人ともおつき合いができますよ。こんな感じで、よく懇親会やパーティーもやります。ジイジ、バアバの声をちょっとお知らせいたしますと、私たちは子供たちを元気にする活動なんです。ただシニアの人とか大人の人も、ジイジ、バアバもみんなハッピーになっちゃうんです。シニアの声を読み上げますと、「自分の二度目の一歩が踏めた」、おっしゃるんですよ。「家庭以外の居場所ができた」、「自信を持てた」、「人を認められるようになった」。

小学校で



わくわく学習室で



懇親会も



「大学生の就職のサポートができた」、「会社員時代には思いもしなかった経験ができた」、「過去の仕事のスキルが役に立った」、「次世代育成に貢献できるチャンスをもたらした」、「給食が食べられた」、「仲間ができた」、まあ、こんなことを言ってくれております。

ということで、これまでの仕事のスキルや人生の経験を生かして、私たちは皆様のことを大歓迎いたしますので、よろしかったら御一緒に活動していただけたらと思っております。

あなたもキーパーソンということで、どうもありがとうございました。

## ジジ、バアバの声

Key Person21

子どもたちを元気にする活動を通して自分もハッピー！

- 自分の二度目の一歩が踏めた
- 家庭以外の居場所ができた
- 自信を持てた
- 人を認められるようになった
- 大切なものが見えた気がする
- 若い人たちと話す機会ができた
- 大学生の友達ができた
- 大学生の就職のサポートができた
- 会社員時代には思いもしなかった経験ができた
- 過去の仕事のスキルが役に立った
- 次世代育成に貢献できるチャンスをもたらした
- 給食が食べられた
- 仲間ができた

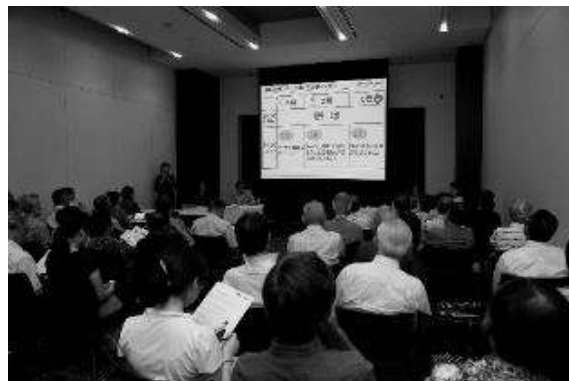


## これまでの仕事のスキルや 人生の経験を活かして

Key Person21

- 学習サポーターとして
- 事業責任者として
- 子どもたちが自分の未来にわくわくする  
わくわくナビゲーターとして
- 経理など組織を支えるメンバーとして
- 活動する大学生へアドバイス人生の先輩として

【澤岡】今日のこの場といいますのは、何か1つの答えを、これが正しいよねという答えを見出そうとする場ではございませんでして、皆さんで、新しい地域づくりって、おそらくこういうことがキーワードになり得るよねということをもまずは共有する場、こういったいろいろなアプローチの仕方があるんだよということと一緒に考える場と、今日はしていきたいと考えております。ですので、そういったお気持ちで、今日、最後まで聞いていただけたらと思います。



では、まずディスカッションに入っていくわけですが、同じようにジジとバアバの力が次世代を育てているというようなアプローチなんです、全く異なる御三方ですので、それぞれ、ほかの方の活動というのでも聞かれるのは多分初めてだったりすると思うんですが、例えば竹内さんから見られて、桑原さん、朝山さんの取組というのがどういう印象、感想、可能性を感じたか、それから、またちょっとこういうことも聞いてみたいなのということがもしあればですが、そういったこともありましたら。じゃあ、竹内さんから、お時間の関係もありますので、簡潔に聞いていただけたらと思います。よろしくお願いたします。

【竹内】 今日のお話は、また取組のテーマといたしますか、形がいろいろ違いますけれども、私は、自分の体験も、それから皆さんの体験も含めてお聞きしたのは、共通しているのはわくわく感だと。自分がわくわくして、あるいは自分が楽しんでやるというのがやっぱり基本にあるのかなと思いました。それは、シニアが一番生き生きできるためには、よく言われることですが、今日3Dという言葉がありましたけれども、前から言われているのは、教育、教養というのが大事だと。という、すぐ生涯教育を思いつかれるかもわかりませんが、今日行くところがある、今日用事がある、そういう今日行く、今日用なんですね。だから、目的を持って、何か楽しみを持ってそこに出かけて行って、何がしかのコミュニケーションをする。それに伴ってわくわく感を感じて、それがまた生き生きと活動できるといった点では、テーマが違って、私は全部共通だというふうなことを感じました。ありがとうございました。

【桑原】 私もその教育ではないですけども、子供も大人も、もちろんおじいちゃん・おばあちゃんも、その役割がある、その地域に誰か自分を望んでいる人がいるという、そういった環境がやっぱり生きる力になるんだなと思いました。おじいちゃん・おばあちゃんもそれで長生きするだろうし、子供もそれで、じゃあ、将来、何になろうかと前向きに考えられる、その役割というのが大事なんだなと思いました。

質問としては、BABAラボはおばあちゃんだけなので、今、そのおじいちゃんの巻き込み方というのはどういう工夫があるのかなというところをちょっと知りたいですね。

【澤岡】 どうもありがとうございます。私も実は桑原さんのお話、バァバはすごくみんな輝いて、美しい女性たちがたくさん出ているんですけども、どう見てもジジジがあまりいらっしやなかったもので、あわせて御二方に、まず桑原さんからの質問ということで、その男性の巻き込み方、ジジジがこれからどう巻き込まれるかというようなお話をいただけたらと思うんですが、あわせて私からもついでに桑原さんに御質問させていただきますと、BABAラボとしては、これから何かジジジに対するアプローチというのも考えていることがありましたら、お二方が御回答いただいた後に、また御回答いただけたらと思います。

【竹内】 難しい御質問ですね。ただ、男性と女性の違いは確かにありますね。女性のほうは、私は横のコミュニケーション、あるいは、非常にとりよめない話であっても、わりに主婦同士のコミュニケーションというのは地域で生まれがちなんですね。そういうコミュニケーションが下手なのが男性なんです。つまりジジジなんです。ですから、気持ちがあっても、ちょっとコミュニケーション不足からチャンスをつかみかねているという、潜在的ジジジのパワーというのが絶対にあると思います。だからアンケートでもよく、何か目的を持って行動したいけれども何から始めていいかわからないという、きっかけを探しているジジジは多分潜在的にあるから、それをどう引き出してくれるか。これは何でもテーマ、その人が少しでも、こういうことで社会のために、あるいはそういう社会のためにというよりも、自分が元気になるために、それから、感謝を受けたら自分のパワーがどんどん出てくるという、その喜びを、何かきっかけをつかめれば、テーマはいろいろあっても、可能だと思います。私自身も65歳まで電気エンジニアと申し上げました。65歳から突然農園という、農業に関心を高めていってここまで来たということもありますし、きっかけだと思いますね。それをつくる方法は、例えば女性がたくさんいる場には寄りやすいですよ。絶対にそう思います。だからうまくそれを呼び寄せる働きかけをしてほしいと思います。

【澤岡】 では朝山さん、いかがでしょうか。

【朝山】 多分BABAラボの中身って育児という感じなのでバアバがいっぱい来てくれるんだと思うんですけども、うちの団体って、男性のジィジが多いんですね。何でかなと、今、初めて考えたんですけども、一番初めに、この団体を立ち上げたときに来てくださったコンドウさんというおじいちゃんも、ある新聞記事を読んで電話をくださったんですよ。任意団体としてスタートして6か月目のときにお電話をくださって、女性ばかりで大変でしょう、やっぱりこういう組織を作っていくときには男性の力が必要なんだよと仰ってくださった。だから、この団体、危なそうと思ってくださることも1つこつかなと思ったり。あとは、今、うちの経理はサイトウというおじいちゃんが一手に引き受けてくれているんですけども、やっぱり経理とかって男性のほうが強かったりする方が多くないですか。そうでもないですか。

気のせいかな、わからないですけども、何か助けてあげなきゃみたいな感じで来てくださる方が多かったりとか。あとワタナベというのが活動してくれていたんですけども、ちょっと病気になってしまったので、経営のところ、「ノウハウが足りなかったら僕が役に立つよ」みたいな感じで仰ってくださって、男の人の得意分野と女の人の得意分野って違うと思っていて、今のバアバ世代は働いていなかった女性の方も多かったと思うんですね。だから子育てというところには得意分野として生かせるけれども、今の時代のジィジは働いてきている人たちですから、仕事をするということがあって貢献ができるのと、あとうちの団体の場合、若者が、高校生や大学生が仕事を持って自立をしていくということの分野なので、自分の働いてきた経験というものをプラスアルファとして考えやすいんですね。経験がそのまま子供に生かせるわけではないけれども、イメージが湧く、将来を決めるとか、働くということに対してイメージが湧くので、男性が多いのかなと勝手に思ったりします。つまり、何か男性が活躍しやすいものをネタにされたら男性がいっぱい来るんじゃないでしょうか。

【澤岡】 ありがとうございます。今、出てきたワタナベさんに関しましては、私もちょっとおつき合いをさせていただいていたんですが、2人でお茶を飲んでいて、「うちの代表さあ、ああじゃない？ だから僕が後ろからちゃんとサポートしてあげなきゃだめなんだよ」と、うれしそうに仰っているワタナベさんの笑顔を、今、思い出してしまって、まさにそこですよ。

【朝山】 そうなんです。だから、代表はだめなほうがみんな助けてくれるというセオリーは、うちでは成り立っているんですね。

【澤岡】 今、こういった話も出てきますが、BABAラボがあるくらいなら、単純な思考なんですけれども、「JIJIラボ」とかがあってもいいんじゃないかと、ちょっと思ってしまうんですが、何かそういうことというのは考えていらっしゃいますか。

【桑原】 実は、今、それを計画しております、今、商品をいろいろ作って売っているんですけども、その商品開発のところと、その販売、営業のところの力がちょっと足りないので、そこをおじいちゃんたちの力に頼ろうかなと、今、BABAラボ内で話が出ておまして、そこで「JIJIラボ」というのを、営業部隊で、商品開発をするかはわからないですけども、つくろうかなと思っているんですね。

まずはリーダーというか、中心になる人を、今、スカウト活動に励んで、いろいろな会で、「JIJIラボ」をやりたいんですけどという話をして、スカウトをしているところです。でもなかなか、ああ、それいいね、こうやってやればいいじゃんと言ってくれる人はいるんですけども、お願いしますと言うと、みんな「うーん」みたいな、ちょっと忙しいんだよとか、俺はちょっとな、みたいな人が多いので、なかなかなくて、もし皆さんの中に「JIJIラボ」をやりたい方がいらしたら、ぜひBABAラボまで御連絡ください。

【竹内】 今話を引き継いだ格好ですけれども、会社でいろいろな役割を果たしてきた男性は、やはりマネジメントだとか、あるいは企画という面では経験が豊富なんですね。だからそういったところが、さっきもちよっと話が出ましたけれども、経営だとか、あるいは企画面で活用されたら能力が引き出せると思うし、それから私の場合は、農家というのは、野菜のノウハウはすごくポテンシャルが高いけれども、そのマネジメント、それから役所に対するいろいろな事業申請の書類づくり、こういうのに関しては二の足を踏むんですね。だから、それは全部私たちがやってあげますということが、一歩が踏み出せるわけですよ。だから、そういう企業経験者の、これは何でもない常識なんだけれども、必ずしも一般化されていないようなところを引き出したら、ジジの活躍の場がもっと広がると思います。

【澤岡】 竹内さん、ありがとうございます。そうですね、あまり意識していなかったんですが、今日ここに男性が、この並びにジジが1人だけだったという、それこそジジを代表する、今、1つアドバイスをいただけたのかなと思います。では朝山さん、この御二方の取組などを聞かれて、何か感じられたこととか質問がございましたらお願いします。

【朝山】 さっき樋口さんのお話の中で、「ファミレス社会」という言葉が、聞いた方は耳にされたと思うんですけども、聞いていない方のために、ファミレス社会は、あのレストランのファミレスではなくて、ファミリーレス、ファミリーがない社会に、今、日本は突入しつつある、地域が崩壊するとか。そういう中で、まさにこのわくわく農園も、BABAラボも、ファミリーなんだなという印象をすごく受けて、何かすごいうれしい気持ちになりました。どちらにも私も参加したい、「私も入れて」と思うような、そんな気持ちになりました。

うちの活動の中でも、御二方の活動のように、ダイナミックにそういう場が、交流の場という感じではなくて、学習支援という形であったり、学校への支援という形だったりするんですけども、やっぱりファミリーのような、さっきの話でいくと、ワタナベは実は亡くなったんですね、こういう話をしているかわからないんですけども。そうすると、子供がお焼香をあげに行かせてくださいと言うんですよ。だからそういうのって、ちゃんとつながっていくというか、ファミリーなんだなという感じを勝手に持ったりするので、そういう印象をすごく受けて、大事な活動だなと思いました。

【朝山】 そういうことを目指して初めからそうされていたのか、結果としてそうなったのか、どちらですか。

【竹内】 やはり何かのつながりというのは、つまり共有するものがあるということが大事ですね。大げさに言えば志。それからまた、趣味の世界だけではなくて、何か一緒にしようとしたときに、ある種の志の共有がない限り長続きしない。その志がどこで共有できるかということを経験にもくろむ、探すという作業が、最初のスタートのときは非常に肝心かなと。

私は、一番最初にお話ししましたように、チーム・ブランパを結成するときに、ふっと頭に描いたのは食材のこと、野菜をつくるということは食材を扱うことですから、料理教室のメンバーに話したら共感を得られるのではないかということから、だからそういう、まず最初のきっかけは、共有するものがあつたということが、今の長続きしている1つの要因ではないかなと思いました。

だから、今までのいろいろな活動をお聞きしても、何かそういう志を共有するきっかけがどっかでできたんだろうなど、あるいは作ったんだろうなど、それがスタートのときには一番大事ではないかと、そんな感じを持っていますね。できたら、共有するものがあればファミリーになれるんですよ。常にそれで会話が回るし、それがポテンシャルにつながっていくわけですね、目標の1つですから、と思います。



【桑原】 私はちょうど子供が生まれて起業したんですけれども、やっぱり子供を育てていくときに、自分たちの家族というか、血のつながりの中だけではなくて、社会の中で育てていきたいなという気持ちが強かったので、なのでBABAラボを作って、そこに自分の子供を置いて、いろいろな他世代と交流して、でも、それが自分の子供だけじゃなくて、いろいろな子供たちが集まってというのは結構最初から意識していましたね。

途中からまた1個ギアが入ったというのは、最初、仕事に人を当てはめていたんですけれども、途中から、そうではなくて、入ってくる人を、来る者拒まずで、来てくれる人に対して仕事を当てはめるところを意識してだんだんやるようになっていったら、さらに世代が広がって、いろいろつながりが増えてきたかなと。今後、職場を通してか、ちょっとわからないですけれども、その疑似家族みたいなところはもっと地域にたくさんできてくればいいなと思いますね。

【竹内】 それと、さっきの共有するものの、最初もそうですけれども、その後、そういう感激なり体験が、よかったねと共有し合えることがまた大切ですね。

【竹内】 これ、実物を持ってきたんですけれども、こういうのが毎年、我々にプレゼントとしてあるわけなんです。これは学校給食の食材を提供した全てのメニューが、調理室の、いわゆる料理のプロセスまで含めて全部記録されていて、年間のそういう料理なりレシピの感想が、生徒たちの寄せ書きでこれにくっついているんですよ。こういうものを、これは1冊しかもらえませんが、そのファミリーで共有して、よかったねという共感を得るとというのが、ファミリーとして、またこれがすごいパワーの、あるいは元気のもとになるんですね。これは実物です。これが26年度で、これが25年度です。こんな立派なものを。これを出してもらうようになるのが、やっぱり学校との間にまた時間がかかったと、こういうことですね。

【澤岡】 確かにそうですね。家族であれば、ずっと時間軸、過ごしてきた時間の長さもありますので、おそらく共有するものって何だろうと考える必要もないぐらい何かがあるのかもしれないですけれども、疑似家族とか、新たなファミリーというお話を考えるときには、時間をかけて共有するものが何なのかと……。



【澤岡】 はい、一緒に考えていくということが、作っていくということがすごく重要なポイントなのかなと思って、今、伺っておりました。私からも質問させていただきたいんですが、今日お招きさせていただいた御三方といいますのは、世間的には、それこそキーパーソンさん、BABAラボさん、それからチーム・グランパさんといいますと、知っている人は知っている、まあ、当たり前ですが、その評価といいましても、成功している方々、成功している取組だというふうには、よく皆さん評価をされます。ですが、おそらく何かやはり……、あら探しをするわけではなくて、うちはうまくいっています、完璧ですというところでしたら、それはそれで、そう答えていただけたらと思うんですが、何か、今、抱えている課題といいますか、大きな壁とか、そういったことがありましたら伺いたいなというのが1点。